〈海路（小笠原）〉

（木村　千鶴）

きれいな海で泳がせてあげたい！　やっとそれが現実となった。泳ぎの好きなラブラドール、泳いでいる時の得意げな様子を見ていると、多摩川や湘南の海でしか泳げないのではあんまり気の毒だし、さりとて、プライベートプールを持っているような友人もいない。

「ジャンボ宝くじ当たったら絶対プールを造るぞ。」

と言う夫の言葉は、右の耳から左の耳へ抜けていく。犬連れの身としては、遠出をすれば宿の心配があるし、海外では、犬は検疫所で懲役の身となる。そんなこと、ノイにさせられない。ちょうど今年の春、ヨット仲間のIさんが、小笠原にログハウスを建てた。東京から南へ一〇〇〇キロ、太平洋に浮かぶ亜熱帯の島、珊瑚礁に熱帯魚、検疫所の独房に入れずに海外？に行ける。そうだノイを連れて小笠原に行こう。

八月四日午前十一時、東京湾の奥、豊海の埠頭では船積み作業が続いていた。ふたり＋ワンを乗せた貨物船が、岸壁を離れたのは十二時半を回っていた。それからまた他の埠頭に接岸、今度はドラムカンの船積み作業。一体何時になったら出発するんだろう。

四日十一時東京港発、小笠原には四十八時間後の六日十一時到着の予定。四十八時間もあれば地球の裏側まで行ってしまう。気の遠くなるような時間だが、気がねなくノイを連れて行け

るとあって、ふたりは躊躇なく貨物船を選んだのだ。

いざ出発となると、用意しなければならない物が沢山ある。人間の物はなんとでもなるが、ノイの物はそうはいかない。ドックフードと食器・犬用のビスケットに粉ミルク・ノイのバスタオルと足拭きタオル各四枚に、シャンプー・消毒薬チメロサールに抗生物質の塗り薬・耳の薬に目の薬・セリーングリーンの十倍液の瓶と皮膚病薬ウンデシレン酸軟膏（肘の手入れのため）、そして、フィラリヤの薬に口直しのチーズ・最後にシーズンの予定なので、タオルで作ったシーズン用オムツ八枚・・・おっと、大好きなボールを忘れてはいけない。

大型トランクに、ふたりの少ない衣類とともに収まったノイの旅行用の荷物を積んだ船は、午後二時、やっと小笠原へ向けて東京港を後にした。潮風が心地好く、見慣れた沿岸の景色が遠ざかって行く。しかし、貨物船のことゆえ、狭いデッキには椅子もなく、風当たりも強い。しかたなくキャビンに入る。六畳程の部屋の両側に二段ベットが一対ずつ、片方の二段ベットの上段に誰か寝ている。むっくり起き上がると、困惑した様子でノイを見つめる。

「咬みませんか？」

「大丈夫です、おとなしいですから。犬がいるのでご迷惑かけるかも知れませんが、宜しく。」

「一杯やりませんか？」

と、缶ビールを差し出すと、その人は恐る恐る降りてきた。高校の教員をしているというYさんは、小笠原にスキューバダイビングに行くという。同じ趣味で話に花が咲くうち、ノイとYさんはすっかり打ち解け・・・というよりYさんがラブラドールを理解して下さり、

「いやあ、最初は事務所で、同室のご夫妻が犬連れだと聞いた時には困ったなあと思ったんですよ。」

なんて言葉が出てきた頃には夕方五時。突然、ドアが開くと、

「メシだよ。」

聞き取れないほどの早口で、それだけ言うと、またドアがバタンと閉まる。呆気に取られているふたりを背に、勝手知ったるYさんはさっさと食堂へ。ノイに待っているように言って、ふたりも食堂へ。急いで食事を済ませてキャビンへ戻る。二十分位だというのに、知らない所で待たせられたノイは、尻尾を振り振り飛びついてくる。

「わかった、わかった。」

六月にノイ連れで泊まりに行ったペンションの犬は、一日留守しても尻尾を三回しか振ってくれないと、オーナーが言っていたけれど、ノイときたら一分間に百二十回位の割で尻尾を振る。この五年間にいったい何回尻尾を振ったことだろう。ラブラドールの尻尾は、代々振り続けられているうちに、今のようなオッターテイルになったのだと私は信じている。オッターテ

イルには、嬉しがりやの尻尾という意味も付け加えたい。

「さあ、ノイもご飯ですよ。」

食事の用意をしている間、ちゃんとお座りはしているものの、腰は宙に浮いている。いつまで経ってもあどけない。旅行中で、おまけのお肉が入っていないドッグフードを、文句も言わずにペロッと食べた。その後、夫がトイレのためデッキに連れ出すが、何だか元気なく戻ってくる。

「やらないんだ。。。。。。」

数時間ごとにデッキを一回りするが、いくらいいと言ってもやらない。犬はベットに入れないように言われたので、仕方なく夫はノイと床に寝る。朝、さっそくトイレに連れ出すが、やはりしない。朝食は元気に食べる。

八時、また突然ドアが開く、

「メシだよ。」バタン。

昼十二時、

「メシだよ。」バタン。

時が過ぎていく。ノイはじっと私の目を見る。

「ねえ、どうしょう?オシッコしたいんだけど、する所がないの。」

その目は明らかにそう言っている。デッキを一周りするが、やっぱりしない。とうとう一日以上経ってしまった。夕方、一周りして戻ってきた夫は、

「やっとやったよ！　デッキの水道の所で。」

ほんのちょっとだけだそうだが、本当によかった。わが家でのノイのトイレは、庭の水道のそばなので、そこなら叱られないと思ったのだろう。波の洗うデッキだから、どこでしたっていいのに・・・。

だんだん船の揺れが激しくなってきた。なにしろ二百八十トンの貨物船である。何万トンというタンカーとはわけが違う。

夕方五時。

「メシだよ。」バタン。

夫は食べたくないと言う。揺れるデッキをノイを連れてうろうろしているうちに、さすがのヨットマンも船酔いしたようだ。Yさんも夕食をかきこむと横になってしまった。私もちょっとおかしい。ノイだけが船酔いもせず、夕食もしっかり食べた。だが、トイレはしない。今度は私がノイと一緒に床に寝る。

朝食は二人ともパス、ノイだけ食べる。食堂から戻ってきたYさんが、

「『犬、静かですねえ。全然なきませんね。』って船員さんが言っていましたよ。前に乗っ

た犬は、そそうするのでデッキに繋いどいたら一晩中ないていたそうですよ。ところで、小笠原には五時頃になるらしいですよ。」

「えーっ夕方の五時、十一時じゃないの・・・あーもう！」

ノイによかれと思った旅だったが、人間の勝手な思い込みだった。ノイは困った顔をしてふたりを見つめている。やはり、十一時になっても島影は見えない。ふたりと違って、食べるだけで出す方の止まってしまったノイを思うと、一秒でも早く船から降ろしてあげたい。丸窓から外を見るたび、ノイも立ち上がる。

四時。

「見えたわよ！」

急いで荷物をまとめるふたりに、ノイはもうすっかりその気になっている。

小笠原父島二見港入港。接岸するのももどかしく、真っ先にノイを降ろす。

早速、芝生に連れていくと、延々とオシッコ、それから大山を三つ。三日分である。こちらもほっとして、やっと紺碧の海に目を向ける。

五年ぶりの小笠原、前回はヨットで来たので遠いのだと思っていたけど、やっぱり遠い所だ。迎えに来てくださったIさんとともにお宅へ。生後四か月という雑種のクロちゃんが、ノイを見てワンワンワンと吠えまくる。ノイは困ってユーターンして来た。

久しぶりの楽しい夕食と、揺れない「しとね」。ノイもすっかりくつろいで、ふたりの足元でスヤスヤ。

都会の熱帯夜と違って、明け方はぐっすり眠れる。

翌日、真っ先に帰りの客船の予約に行く。もうノイにあんな思いはさせられない。定期航路の小笠原丸でも二十九時間かかるけど、五十四時間よりはずーっとましだ。だが、特等の個室をとっても、犬はキャビンに入れられないとのこと。犬舎は船側で用意すると言う。他に方法もないので、ふたりも一晩犬舎のそばで夜を過ごす覚悟をして、予約を済ます。もちろん、犬も有料だ。

日中の暑さが和らいだ夕方四時頃、皆で海水浴に。小笠原で一番良い海水浴場に、Iさんのログハウスは最も近い。

砂浜に着くと、ノイは、

「わあい！海だ！　ねえ入ってもいい？　ねえ！」

「いいよ。」

ザブンと飛び込むノイに、Iさんはびっくり。透明な海で、気持ち良さそうに泳ぐノイ、

「楽しいね、楽しいね。」というかのように、ふたりの間を行ったり来たり。なんて嬉しそうなんだろう。やっぱり連れてきてよかった。あんなに辛い思いをさせたけど、こんなに喜んで

いる。そのうち思わぬ奇跡が起こった。水の怖いクロちゃんが自分から海に入ってきたのだ。確実にノイにつられたのだ。Ｉさんは大喜びである。クロちゃんに気を取られていたＩさんが叫ぶ、

「ノイがいない！」

慌てて沖に目をやると、シュノーケリングをしている夫と肩一線で泳いでいる。これではよく見なければノイは見えない。足ひれを付けて泳いでもちゃんとついて行ける。いや、ノイの方が本当は速いのかも知れない。ぴったりと寄りそって一緒に泳ぐのが楽しくてしようがないのであろう。Ｉさんは改めて感心。

「こりゃ、アザラシだ！」

さすがにクロちゃんは、さっさと浜へ上がってしまった。

ノイの泳ぎは素晴らしい。前足が力強く水をかく。鼻から吸い込んだ空気を、口の両側のムニュムニュからフシュ、フシュと、鰓呼吸さながらだ。方向転換は必ず尻尾から。尻尾が右に曲がるとその直後に右折する。左折のときも同様である。疲れたろうと、途中で身体を持ち上げても足は動いている。まるで疲労を感じないようだ。ふたりが浜で一休みしていると、また泳ごうと催促する。結局、一時間位泳ぎっぱなし。全く呆れてしまう。

小笠原の毎日は自然と共にある。午前中、女性軍が車で十五分ほどの町へ買い物に行った

り、洗濯に行ったり（洗濯機がない）している間、男性軍は銀ねむの林を切り開く。周りをノイとクロちゃんが、一緒になって歩き回る。午後は昼寝の後、ティータイムを楽しみ、いざ海水浴へ。定期船が二見港に停泊している二日間は、夕暮れのプライベートビーチ？にも観光客がチラホラ。突然現れた黒い犬が、海へサブンと飛び込む様子に、観光客は、泳ぐのをやめてしばし呆然。人口の少ない小笠原のことゆえ、あっという間に泳ぐ犬、ノイの噂が広がる。町へ行っても、知らない人が「ノイちゃん。」なんて声を掛けてくる。海水浴の後は庭の露天風呂で一風呂浴び、夜は銀ねむの木のキャンプファイヤーを前に、デッキチェアーにひっくり返って満天の星を仰ぎ、四人＋二匹の宴会だ。八キロ足らずのクロちゃんはIさんのお腹の上でじゃれている。ノイは、ふたりの間で長々とねそべっている。回りに人家のないのをいいことに、砧（きぬた）村からきたタヌキ客を迎えて、I家は夜毎の大騒ぎとなった。枕投げでも飛び出せば、まるで修学旅行生と変わらない。人間のたわいないはしゃぎぶりに多少呆れながらも、ノイは満足げに参加している。向かいの山にかかる月が大きく移動した頃、タヌキ村は静けさを取り戻す。

ある日、キャンプのお誘いを受けた。一泊どまりで無人島に行くという。もちろん、犬二匹もどうぞとのこと。三時間ほどの航海である。人間十数人と犬二匹を乗せた漁船は、インク色の大海原を白波けたてて走り抜ける。野性の山羊の楽園となっているその島には、テンダー

（小船）に乗り移って上陸しなければならない。ノイは自分から進んでテンダーに乗り移り、食料やテントを運ぶ夫と共にかいがいしく行ったり来たりしている。ところが、スキューバーダイビングの間待つように言われ、キューン、キューンと情けない声。小さなクロちゃんと違い、大きな甘えん坊に同行の人たちに笑われる。リードを離してあげると、慌てて後を追おうとするが、何処に行ったのかわからず、岩場で途方に暮れている。

夕食は、獲ったばかりの海の幸。夜は、星を数えながら眠りに就く。九千幾つまで数えた人もいた。

翌朝、ノイが、じっと私を見つめている。

「どうしたの？」

と尋ねると、困った顔。何かあるに違いない。丁寧に点検すると案の定、足の裏のパットがばっさり切れている。

「わあ痛そう・・・・・。人間だったら大騒ぎするのに。」

と周りの人たち。昨日、夫を追って海へ入ったときに切ったに違いない。やっぱり薬を持ってきてよかった。手当てをしてバンドエイドをペタ。わかって貰うと気が済むのか、足取りはいつもと変わらない。帰りの漁船ではすっかりくつろぎ、マイペースで昼寝。ノイのサバイバルも終わった。

翌日、町に出ると、

「ノイちゃん、足切ったんですって？」

さすが小笠原、もう伝わっている。午後、貨物船でご一緒したYさんが訪ねてみえた。

「よくここがわかりましたね？」

「犬連れのご夫妻というと、『ああ、Iさんの所に来てるお客さんでしょう。』って・・・。」

ノイのお陰で、ふたりは、小笠原では無責任な行動が取れなくなってしまった。こちらが知らなくても、あちらは何でも知っている。ノイはといえば、澄ました顔で車に乗り込んでいる。庭に乗り入れた車に、ドアさえ開いていれば、出掛ける予定がなくても一人で乗っている。呆れたIさんが、

「変わってるよ！帰ったらボデーだけ買って庭に置いてやれよ。」

今日もクロちゃんが、ノイの周りをぐるぐる回っては、時々尻尾に咬みついている。そろそろクロちゃんともお別れだ。

朝、クロちゃんがノイのタオルの上で寝ていた。

「クロちゃん、長い間有難う。ノイのタオル置いてくね。」

二十一日、二見港はシーズン最後の船が出るとあって、観光客でごったがえしていた。他の

乗船客より一足早く案内された場所には、ボクサー犬の先客がいた。犬舎は一つしかない。しばらくして、ノイのために用意されたのは，ゴミ用のコンテナだった。

「ゴミのコンテナじゃありませんか・・・。デッキに居てはいけませんか？人間もずっと一緒に居ますから。」

「他のお客さんがなんて言いますか・・・・。」

「文句が出たら考えますので、デッキの隅に居させてください。」

船員もそれ以上は何も言わなかった。ふたりは、デッキの片隅の椅子に海に向かって腰掛け、ノイが目立たないように、足元に敷物を敷いて伏せさせた。やがて、他の客が次々と乗船、デッキは見送りの人に手を振る乗客で溢れる。間もなく出航。動きだした小笠原丸の周りを、ダイビングサービスのボートや遊漁船が追う。小笠原ならではの出港風景だ。この時ばかりは、誰がどの見送りの船に乗ってもよいことになっている。グラスボートに乗ったIさんご夫妻が手を振っている。

「あっ！大勝丸だ。」

無人島に行ったときに乗った大勝丸では、お世話になった方たちが一所懸命手を振っている。

「ノイちゃーん！」

犬好きのLさんが大声で叫んだ。慌ててノイを立たせ、手すりの間から指さして教える。沢山の船に、ノイは何処から声がするのかわからない。ノイを見つけてLさんが、再び叫ぶ、

「ノイちゃん、さようなら。またいらっしゃーい。」

二見港を出ると、小笠原丸はスピードを上げた。見送りの船が、だんだん小さくなる。島影が薄くなる頃、デッキの人影もまばらになり、手持ち無沙汰になった乗客がノイに気付く。

「あ、小港で泳いでた犬だ。」

物珍しそうに眺める人。声を掛けてくる人。公の乗り物に犬が乗っているのがそんなに面白いのかな？　なんて後進国なんだろう。「犬に市民権を！」主婦連の向こうを張って、犬連でも結成したい位だ。

夕焼けのパノラマが終わると、海はただただ暗い。乗客はほとんどキャビンに引き揚げ、夏とはいえ、二十ノット近い速度で走る船は風を切り、デッキは冷えてきた。ふたり＋ワンは、風当たりの少ない所へ移動する。おトイレは、やっぱりしない。人間用の広いトイレに連れていっても、クンクンやってみるだけ。心なしかションボリ見える。夜中に見回りの船員さんがやってきて、座ったまま居眠りしているふたりに、

「大丈夫ですか？」

「ええ。」

「向こうにデッキチェアーがありますから、そこで休まれたらいかがですか？」

そして、毛布を持ってきてくれた。デッキチェアーは二台だけだ。一台にノイを寝かせ、もう一台にふたりが交替で寝る。やっと落ち着けたのか、ノイは寝息をかき始めた。時々しぶきが飛んでくるので、頭まで毛布を被る。寝不足の身には、朝日が眩しく、しつこく毛布を被り続けた。ノイは退屈の余り、時々立ち上がっては周りを見回す。

「まだ海だ・・・。」

と、ノイの独り言。

「座ってなさい。」と言われて、また渋々と座り込む。

昼過ぎ、やっと房総半島が見えてきた。苦しい往復と、楽しい滞在。ノイの臨海学校は間もなく終わる。

ラブラドール、人間との行動を好む、この愛すべき仲間。またいつの日か一緒に旅をして、もっともっと社会性を養ってあげたい。外国の学校では、授業のある時でも、学校を欠席しての旅行を認めるところがあると聞く。それは、教科書よりずっと多くのことを、旅は教えてくれるからだ。犬だって同じ、経験を重ねるうち、より味わい深い犬になるだろう。日本でもアメリカの旅行案内のように、犬ＯＫのマークが付いたホテルが増えますように・・・。

船は、予定の時間に、竹芝桟橋に横づけされた。出迎えを頼んでおいたＳ君の顔が見える。

大勢の人に混じって下船したノイは、大好きなS君を見つけた嬉しさではしゃいでいる。

「ノイ、そんなに引っ張らないで・・・。」

その後、小笠原の母島に、ノイと気兼ねなく滞在できるように、小さな山小屋を作った。到達するまでの時間は辛いけれど、紺碧の海に囲まれた島での生活を、海水浴大好きノイは、とても気に入った様子だったから。ベランダからは青い青い海が見える。思う存分泳いだ後、くつろいで寝そべったノイの鼻先を、緑色のアノールトカゲがチョロチョロと走り抜ける。赤とんぼが、ノイの背中に羽を休める。ふたり＋ワンに、ゆったりとした島の時間が流れる。ラブラドールは、どの子も好きな人と過ごす、そんな時間が大好きだ。

そして、小笠原に行く機会も多くなり、ノイも次第に船旅に慣れてきた。デッキで一夜を過ごす苦痛に懲りて、個室をとり、内緒でノイ用の寝具を部屋中に敷き拡げ、ふたり＋ワンは、ひっそり寝て過ごすことにしている。ノイの方も、心得たもので、誰かがドアをノックすると、息を潜めてクンとも言わない。もちろん、お部屋は出ていく時の方が綺麗なくらいに掃除する。

相変わらず、おトイレはしてくれない・・・。それだけが悩みの種。その代わり、乗船時に差別されることも、デッキを歩くのに気兼ねすることもなくなった。船員さん達もノイがトイ

レをしないのを知っているのだ。その上、下船時には、船長さんがタラップに群がる人々に、

「すみません、先に降ろしてあげてください。ずーっとトイレを我慢していたので・・。」

と言ってくれる。

「いい子なんだよね。人間にはできないなあ。」

道を開けてくれる下船客の囁きに、ふたりの頬はゆるむ。